

「2025年度香港中文大学サマープログラム派遣参加報告書」

京都大学工学部2年 鵜飼 夏帆

① 学習成果

今回の短期留学で最も大きな変化は、英語を使うことへのためらいが少なくなった点である。これまでは「自分の英語では伝わらないのではないか」という不安から積極的に話すことをためらっていた。しかし、クラスの半数以上が非日本人であったことや、英語を話せる友人の助けもあり、自然と英語でコミュニケーションをとる機会が増えた。その中で、片言の英語でも相手が真剣に聞いてくれるという経験を重ねたことが自信につながったと思う。

この三週間のプログラム自体は英語学習を目的としたものではなく、英語力そのものが大きく向上したわけではない。しかし、深い話をするには今の英語力では足りないと感じ、今後はさらに英語力の向上に力を入れたいと考えようになった。また、英語圏への短期留学にも挑戦したいという意欲が芽生えた。さらに、非日本人に限らず普段は接点のない人々と関わる中で多様な価値観に触れることができ、今後も国内外を問わず様々な人々と積極的に関わっていきたいと考えようになった。

② 海外での経験

香港は広東語・普通話・英語の三言語が交わる都市であり、8～9割の人が普通話を理解できるという点を実際に体感できたのは興味深かった。若い世代の普通話は内地の人と同様に聞き取りやすい一方で、年配の方々の普通話は広東語なまりが強く、香港における普通話教育の変遷を感じることができた。

休日にはマカオや深圳を訪れた。マカオでは中国語の下に英語ではなくポルトガル語が併記されている点が新鮮であり、また経済の柱となっているカジノ市場の規模の大きさを実際に目にできたのも印象深かった。深圳では基本的に中国語しか通じず、外国人と分かっても会話のスピードを落とさない点や、歩道を走るバイクなど、日本ではあまり見られない光景を経験できて新鮮であった。さらに、店員の接客態度や、電車内でイヤホンをせず音楽を流したりスピーカーで通話したりする様子など、日本とのマナーの違いを体感できたのも大きな学びであった。

一方で、香港の気候や食事が自分には合わず体調を崩し、三週間の半分ほどは満足に食事をとれなかったのは苦勞であった。しかし、その際に日本の薬や食べ物を分けてくれた友人に支えられ、人の優しさを改めて感じる事ができた。実際に生活してみて「香港は自分には合わない」と気づけたことも貴重な経験である。また、人間関係においては価値観の違いや言語の壁により摩擦が生じる場面もあり、共同生活の難しさを実感する三週間でもあった。

③ プログラム内容

今回のプログラムでは、初級・中級・上級の三つのクラスに分かれ、午前は文法、午後は会話を中心に学んだ。私が所属した上級クラスは授業のほとんどが中国語で行われ、午後には4回の課外活動があった。私はこれまで南方の発音に慣れていていたが、今回は内地出身の先生による北方の発音、しかも早口で特徴的な中国語に触れることができた。また、香港特有の広東語なまりの中国語にも接することができ、中国語の聞き取り能力が向上したと感じている。課外活動では、授業で学んだ場所、例えば廃止された採石場など観光では訪れることのない場所に行くことができ、非常に興味深かった。

ただし、以前参加した台湾のスプリングプログラムと比べると、今回は参加人数が少なく、また非日本人が多かったため中国語能力の全体的なレベルはそれほど高くないと感じた。台湾では5つのレベルに分けられていたのに対し、今回は3つしかなく、クラス内でのレベル差が大きかった点も課題だと思う。そのため、中国語教育の充実度に関しては台湾の方が優れていたと感じた。

共同セミナーでは中文大学の歴史学科の学生と交流する機会があり、基本的には英語での会話であったため自

分の英語力の不足を痛感した。しかし、中文大学の伝統や香港における日本への理解を知ることができ、大変有意義であった。また、初めて中国語でプレゼンテーションを行えたことも大きな経験となった。

④ 進路への影響

現時点で進路に直接的な影響はないが、今後も中国語・英語の力をさらに伸ばしていきたいと強く思うようになった。